

イギリスへ渡った茶 (4)

富山八十八 (とみやま やそや)

ジェームズ2世「陽気な王様」といわれたチャールズ2世には愛妾が13人、庶子は14人いたが嫡男はなく、1685年に没すると王位は弟のジェームズ2世に継承された。

ジェームズ2世はフランス亡命中にフランス陸軍で有能な軍人として頭角を現した。王政復古でイギリスに戻ると海軍大臣としてイギリス海軍を充実し、オランダ艦隊を大破するなど国民の人気を博した。しかし彼は自分がカトリックであることを公表、議会はカトリック教徒が公職につくのを禁じたために海軍大臣の職から追われる。さらに再婚した相手がカトリックであったために、国民は生まれてくる皇子がカトリックになることを危惧した。

ジェームズ2世に皇子が誕生するとイギリス議会の有志はジェームズ2世の長女でオランダのオレンジ公ウイリアムと結婚していたメアリーとその夫をイギリスへ招聘する。

オレンジ公家はオランダ共和国の元首を継承する名門で、またウイリアムはチャールズ1世の孫に当たる。

名誉革命 かねてイギリスの不穏な政治情勢をうかがっていたウイリアムは招聘に応じて1万5千の兵を率いイングランドに上陸、イギリス軍と対峙する。ジェームズ2世は突然兵を引いてフランスに亡命した。血を流すことなく王が交代したので「名誉革命」と呼ばれる。

新しいイングランド王はメアリー2世とウイリアム3世との「共同君臨」という珍しいかたちになった。通常Queenは「女王」か「王妃」を指すが、メアリーは女王であり王妃であった。

アン女王 メアリー女王の後を継いだのが妹のアン女王である。アンはデンマークの王子ジョージと結婚していた。

アンは14人の子供を産むが不幸にもすべて死産や夭折で失い、悲しみのあまりブランデー

におぼれ「ブランデー・アン」と呼ばれた。

喫茶への関心も高く「アン様式」と呼ばれる洋梨型のティーポットを造らせている。

1603年にスコットランド王ジェイムズ6世がエリザベス女王の後継者としてイングランドに迎えられ即位してジェームズ1世となって以来、両国は同一人物を国王に戴く「同君連合」だった。アン女王の1707年にイングランドとスコットランドは連合して”Great Britain”となった。

アン女王は1714年に49歳で他界する。ウイリアム3世が定めた王位継承法によってハノーヴァー家のジョージ1世が即位した。

1662年のキャサリン王妃のチャールズ2世への輿入れ以来アン女王までの52年間、イギリスの宮廷では喫茶に関心のある女王たちによって喫茶の風習が広まった。

近世イギリスの社会階層

この時代のヨーロッパの国家の構成は、国王→貴族→平民が一般的であったが、イギリスでは貴族と平民の間にジェントリーが介在した。

- | | |
|---------|-------------|
| ①国王 | |
| ②貴族 | 200家族 |
| ③ジェントリー | 貴族+ジェントリー5% |
| ④上層クラス | 20% |
| ⑤一般民 | 75% |

イギリスの貴族の数が少ないのは、15世紀中葉に王位を巡っての30年におよぶ「バラ戦争」で貴族が半減したことによる。200家族ではイングランド全土を統治するには不足である。そこでジェントリーを取り込んだ。

(1) 貴族は広大な所領manorに住む領主the Lord of Manorで、彼らの住まいがmonor house。

貴族の定義は、

- ①長子相続で生まれながらにして貴族である。

②紋章院 the Court of Arms に登録された紋章をもつ。

③ジェントルマンらしい教養を身につけた者。

彼らは貴族院議員であり、自分の所領にあっては治安判事として管轄内の司法・行政をつかさどる。これらの公務は無報酬で「ノブレス・オブリジュ noblesse oblige」(高い地位には義務がある)といわれる伝統があった。

(2) 貴族の次がジェントリーで、内訳はナイト、スクエア、ジェントルマンなどで爵位はない。経済的な実態では地主層である。貴族とはお互いに通婚し、貴族と併せて「ジェントルマン」階級を形成していた。国民の5%。

(3) 上層階層。富裕な農民、ヨーメン、市民権をもつギルドの親方、富裕な商人、外国貿易を行う大商人、銀行業者、弁護士、医者、上位の聖職者、高級軍人、高級官吏など。彼らは有産階級ではあるが身分的には平民である。この時代は国民の20%。

しかし田舎に土地を買い1~2世代後にはジェントルマンに同化する者もいた。

ヨーメンは百年戦争時の射手で田舎に住みジェントルマンと農民の中間に位置する。この時代には約16万人がいて国家と軍隊を支える堅実で重要な役割を果たしていた。そのユニークな服装は現在ロンドン塔の警備員に見られる。

ピープスの日記 サミエルピープスは1660年1月1日から1669年5月までの10年間にわたる膨大な日記を残した。それによって当時のイギリス社会の様子が生き生きと詳しく知ることができる貴重な文献である。

ピープスは苦学してケンブリッジ大学を出て海軍省に入りジェームズ2世海軍大臣の秘書官を務め、最後は海軍大臣になった。

ピープスの日記に茶が出てくるのは2箇所。

①1660年9月25日に海軍省でこれまで口にしたことのないteeなるものを1杯もらったと記している。1660年といえばその大晦日にイギリス東インド会社にエリザベス女王の特許状が下りた年である。

②1667年にピープスは、帰宅すると妻が茶をいれているのを見た。医師の勧めで風邪と体の不調に効くと言われたからだとして記している。

ピープスが茶を知って7年後、高級官僚夫人

が薬としてだが口にしていることが分かる。

茶の販売 コーヒーハウスの「ギャラウエイ」では初めは店内でサービスする茶の抽出液を容器に入れて販売したが、やがて茶葉を販売するようになった。

茶は薬局や食料品店でも売られるようになったが、茶を販売する食料品店は特に“tea grocers”と呼ばれ店の格が高かった。

1717年には「トムズ・コーヒーハウス」が茶販売店「ゴールデン・ライオン」を開いた。

商業革命と生活革命

1660年のイギリスの王政復古からはほぼ半世紀、新大陸やアジア・アフリカとの交易が年々盛んになり、新規物産が流入し、ヨーロッパ経済は従来のヨーロッパ圏の規模を超えて拡大し活況を呈した。これを「商業革命」とよぶ。

イギリスではコーヒーハウスが出現した1665年から名譽革命の1688年の23年間に国富は23%、国民所得は8%上昇した。この経済発展をリードしたのが外国貿易だった。イギリス国内ではヨーロッパ外から輸入された物産、その他国への再輸出が1700年頃には国富の1/3を占めるようになった。

この時代、イギリス社会は衣食住にわたって目覚ましい変化が生じた。

衣料 イギリス人の衣料はこれまでの毛織物からインド輸入のキャリコが飛躍的に増えた。

キャリコはポルトガル人が「カリカットの人が着ているもの」の意味でつけた名で、インド産綿織物のことである。綿はインドが原産地である。

イギリスでは初めの頃はリンネル(麻製品)と品質が同じであるのに値段が1/3と安かったのでカーテン、ベッドカバー、テーブルクロスなど家庭用品に使われていた。

王政復古の頃から東インド会社の働きかけもあって貴婦人や上流階級の女性たちが衣服として用いた。彼女たちはファッションを先取りする人たちだった。キャリコはウール製品とちがって色合いが多彩だし、軽くて重ね着しておしゃれに着こなすことができた。インド舶来のシマ柄のキャリコを身につけることはジェントルマン階級のステイタス・シンボルでもあった。1690年代を通じて大量のキャリコが輸入

され、「衣料革命」を巻き起こした。

これに対し毛織物業界、絹織物業界から反対運動が起こり、キャリコ業者と活発なパンフレットによる応酬は「キャリコ論争」と呼ばれた。議会は1700年に「キャリコ輸入禁止」1720年には「キャリコ使用禁止」法を可決した。しかしキャリコの人気は衰えず、やがて綿製品の国産化がはかられ産業革命の導火線となる。

住宅 1665年のペストの大流行、1666年のロンドン大火で1667年に「再建法」が議会で可決され、木造家屋は禁止、家屋はレンガか石造り、道路は広く真直ぐで石で舗装し歩道をつけることになった。

食料 食料品では西インド諸島から砂糖、オレンジ、レモンなど。中南米から馬鈴薯、トウモロコシ、ピーナッツなど。アジアから茶、米、バナナ、西瓜、桃など。アラビアからコーヒーなどがもたらされイギリス人の食卓を変えた。**ティーローズ** イギリスの国花であるバラは、もともとオリエント原産種で年に1回初夏に咲く。この時期に中国原産のバラが到来してこれが秋咲き。そこでオリエント産と中国産を交配して春秋の年2回咲くバラができた。

中国産バラのなかでも特に香りのよい品種に「ティー・ローズ」の名前がつけられた。ちょうど茶が出現した時代だったから貴重で憧れのティーの名がつけられたのだ。

この商業革命の大きな受益者の中心となったのは海外貿易の大商人と大地主だった。

大商人は「航海条例」に守られてアメリカ、東インドから新規物産を輸入して売買した。

ジェントルマン層はヨーロッパでの穀物価格の上昇で議会を通じて穀物の輸出奨励制度を組織化した。

推進者 1711年3月、新しい新聞『スペクター』(Spectator)が発刊された。同紙の題字横につけられたキャッチフレーズは「バターつきパンとお茶の朝食をとっていらっしやるすべてのファッションナブルなご家庭へ」だった。このキャッチフレーズは当時の進歩的な人びとの間での朝食の変化をいち早くつかまえている。それまでの伝統的な朝食のオートミル、あるいはビール(低アルコールのどろどろした自家製品)からパンと茶への変化である。同紙が読者層として期待したのは「すべての規律正しい家

庭、紳士(商人、医者、弁護士など)と女性たち」だったが、彼らが新しい海外物産を積極的に求め商業革命を推進した。

彼らは国民の約20%を占めた富裕層と、中流階層はまだ形成されていないが、「ミドリング・ソート」Middling Sortsが台頭しつつあった。彼らはとりわけ都市部で活発だった。

この頃の喫茶事情について滝口明子『英国紅茶論争』(講談社選書メチエ、1996年)では次のように述べている。

①『スペクター』のなかでの家庭で飲まれる茶は大きく二つに分かれる。朝食のときの茶と午後の訪問で集まって飲む社交的な茶である。

②お茶請けもなく茶だけで飲まれていたようだ。お菓子が出てくるのは1740年頃から。

③カップに取っ手はなく熱いカップをソーサーに載せたまま口に運んでいたようだ。

④ミルクは入れていないようだ。

⑤1730年代中頃になると商人階級の家庭での茶会を描いた絵がある。

⑥1750年頃に彫金師が友だちと茶を飲んでいる画がある。都市のギルド職人の間にも茶が普及していた模様だ。

茶は18世紀中葉には中流層にまで飲まれていたようだが、下層までは飲まれていなかった。

都市と公園 イギリスでは17世紀にはロンドンとは別格として人口1万人以上の都市が生まれていた。商業革命が進むと18世紀にはリバプール、ノリッジなどの港湾都市、バースなどの保養社交都市が発達し、新しい都市文化が生まれてきた。そのひとつが公園である。

都会に人びとが集まるようになり、住宅が建て込んできて息抜きの空間が求められるようになった。王室の狩猟地であったハイドパークやセントジェームズが開放されて公園となった。18世紀のロンドンでは60余りの公園があった。なかには遊興施設のあるヴォクソールやラネラなど結構な入園料をとるところもあった。

公園のなかにティーガーデンができ、コーヒーハウスとちがって男女ともに入ることができた。休日には着飾って公園の小径をそぞろ歩き、ティーガーデンでお茶を飲み、着飾った人びとを眺めるのが楽しみだった。

イギリスへ渡った茶 (5)

富山八十八 (とみやま やそや)

各国の東インド会社とイギリスのインド進出
オランダ、イギリスに続いて各国にも東イン
ド会社が設立された。

- 1616年 デンマーク東インド会社
- 1664年 フランス東インド会社。重商主義
者の宰相コルベールの主導による。
- 1695年 スコットランドの「ダリエン会社」
- 1722年 ドイツ「オステンド・インド会社」
- 1731年 スウェーデン東インド会社
- 1754年 プロイセン・ベンガル会社

しかし何といてもオランダとイギリスの東
インド会社がアジア貿易の代表格だった。

イギリスの商業革命は1660～1760年の100
年間で、輸入品はかつてのスパイス一辺倒から
キャリコ、絹、茶など多様化していった。また
イギリスからの再輸出品も激増している。これ
によってイギリス東インド会社の貿易も拡大し
た。輸出品はイギリス得意の毛織物はあまり人
気がなく圧倒的に銀だった。

東インド・アメリカからイギリスへの輸入額と再輸出額

		1660年代	1700年代	1720年代	1750年代	1770年代
輸入	タバコ	70	249	263	560	519
	砂糖	294	630	928	1302	2364
	キャリコ	183	367	437	401	697
	茶	0	8	116	334	843
	コショウ	80	102	17	31	33
再輸出	タバコ	0	421	389	953	904
	砂糖	0	287	211	110	429
	キャリコ	0	340	484	499	701
	茶	0	2	269	217	295
	茶再輸出率	0	36%	232%	65%	34.80%
	コショウ	0	93	44	104	110
	輸入 A		708	1393	1883	2439
	再輸出 B		1986	2714	3492	5818
	A/B		36%	51%	53%	42%

*再輸出額は加工その他の事情により輸出額を上廻る場合もある。

資料：浅田実『商業革命と東インド貿易』p. 9. 表1～2. 法律文化社, 1984年

新生イギリス東インド会社の出発

イギリス東インド会社はオランダ東インド会
社よりも早くスタートしたものの資力で劣り、
ジャワのバタビアに根拠地を構えて積極的に攻
勢にでるオランダの後塵を拝していた。特に東
南アジアでの香料交易ではオランダに太刀打ち
できずイギリスはインドへ向かった。

イギリスのインドにおける最初の拠点はイン
ド東海岸コロマンデル海岸のマドラスで、ここ
にオランダのようにセント・ジョージ要塞を築
いた。1667年には会社はチャールズ2世から
ボンベイを譲渡された。キャサリン王妃が
チャールズ2世との結婚の際に持参金として
もってきたものだ。会社は見返りに王に5万ポ

ンドの借金を提供した。以後、会社は1670～80年に目立った発展をするが、それにはチャールズ2世の支援効果が見られる。王は会社に多額の貸付金を要求した。1681年には王に対する32万ポンドを超える多額の貸付金は、会社から王への”自発的”な寄付金とされた。

合同イギリス東インド会社 イギリス東インド会社はスタートから12年後の1613年に、それまでの1航海ごとに清算する「個別航海」方式から、数航海を1度にまとめて行う「合本航海」方式によって資力を増し、航海は成功するようになった。

名誉革命後の1698年に経営悪化した東インド会社に対抗して「新東インド会社」が設立された。新旧のイギリス東インド会社はインドで激しい買付け競争を演じた。

1709年に国王ウイリアム3世と新・旧会社は協定して両社を一本化し「合同イギリス東インド会社」(The United Company of Merchants of England trading into East Indies)として再出発した。

会社の組織と運営は現在の株式会社に近いもので、この合同会社をもって「正式のイギリス東インド会社」とする説もある。

この会社は商業独占権をもち、軍隊をもち、外交権までもつ、いわば1つの独立国家並の強い権限を与えられていた。

会社の強い特権は特許状によって保障されていた。それゆえに特許更新では利権がらみで王室や政府が干渉し、その代償として王室と政府への寄付が欠かせなかったし、政治紛争に巻き込まれることもしばしばだった。いつれにしても特異で強力な合同イギリス東インド会社がこれより1858年まで1世紀半にわたって存続することになる。

イギリス東インド会社の中国茶貿易

イギリス東インド会社船は1664年にマカオに到着したが、ポルトガルの妨害と中国側の方針によってなすすべもなかった。

この頃10kg余りの茶がイギリスに輸入されているが、これはオランダから買い入れたものだった。

17世紀末からイギリス東インド会社はイン

ドで本格的な活動を開始したので、中国市場へのイギリス毛織物の輸出を拡大しようと広東、舟山、廈門(アモイ)に再び接近を始めた。

中国茶の直接輸入 1669年に会社は初めて中国から直接、茶100kgを輸入したが翌年は激減し、まだ安定した輸入はみられなかった。

1672年に絹の供給地トンキンに、1676年にはアモイに商館を開設した。しかしアモイは清皇帝の直轄地ではないので、これは中国貿易の正式な開始を意味するものではなかった。

1685年に会社のロンドン本社はインドのマドラス商館に、茶は伸びてゆく商品であり宮廷の高官への贈り物として使うので良質で新鮮な茶を毎年5～6缶送るよう指示している。

会社はインドで中国から来航する中国船やポルトガル船からも茶を買い入れていた。1690年に約17トン、1699年に約6トン、1701年に約45トンを輸入するがその後はさほどの輸入はない。

18世紀に入ってヨーロッパでの緑茶の需要が大きくなった。

1715年にイギリス東インド会社は清政府から広東に商館設置を許された。会社は商館を設置した翌年には3隻の船で茶、絹、陶器などを持ち帰った。以後、毎年定期的に茶が輸入されるようになり、やがて爆発的に伸びてゆくことになる。

1710年前後、広東からの緑茶輸出の80%はイギリス東インド会社とレバント地方から来航した船が占め、オランダはわずか13%に過ぎなかった。

オランダはバタビア政庁がジャワ在住の中国人との関係を考慮して中国船がジャワに持ち込む緑茶を買っていたので広東での直接買いつけは少なかった。それにはオランダ政庁がジャワ在住の華僑資本によってコーヒーその他ジャワでの殖産事業を考えていたからである。

バタビアへ来る中国茶は、イギリスやレバント商人が良品を仕入れた後の粗悪品であり、加えて湿潤な気候のなかで倉庫に長期間保存されるのでオランダ会社の茶はとうていイギリス会社に対抗できるものではなかった。オランダはジャワでのコーヒー栽培とサトウキビ栽培に力を入れていた。

イギリス東インド会社は中国との貿易ではポルトガルの先例にならって「管理人制度」(supercargo)をとった。中国側の窓口は「公行」(Happo)で、彼らは清政府から認可された指定商人だった。外国商人が茶や陶器を公行以外の商人や生産家から直接取引することは禁じられた。1728年に清の税関は輸出入品に10%の関税を要求した。

イギリス東インド会社は諸外国東インド会社との競争の激化、清政府の管理貿易の強化によって、中国茶の買占め、独占への要求を高めた。

この頃ポルトガル、オランダ、フランス商人たちの中国へのアヘンの輸入が目立ってきた。1729年、雍正帝はアヘン輸入禁止の勅令を出した。イギリス東インド会社は1733年に会社船の船長にアヘンを持ち込まないように警告している。

1757年、清国政府は外国貿易を広東1港に制限した。1759年には外国貿易をいっそう取締り、主な中国の輸出品である綿実、茶などに種々の制約を課して諸外国は厳重な貿易統制を受けることになった。

しかしながら1740～50年の広東貿易では、イギリス東インド会社がヨーロッパ諸国中、第1位の地位を占めていた。

イギリス東インド会社の1760年の輸出品では茶がインド・キャリコを抜いて第1位となり、会社の東インドからの輸入品の40%を占めた。

増えるイギリスの茶消費

イギリス17～18世紀の茶輸入量

年度	輸入量千ポンド	前年比
1678～89	49	100
1690～1700	223	453
1700～1710	786	353
1721～1730	8,880	1,129
1731～1740	11,664	131
1741～1750	20,214	173
1751～1760	37,350	185

1678～1710年は西村孝夫『イギリス東インド会社史論』p91より

1721～1760年は浅田実『商業革命と東インド貿易』p.154より

18世紀のイギリスでの中国茶は「グリーンティー」と「ブラックティー」に分けられる。

中国の緑茶の製法は「釜炒茶」であり、日本の「蒸し茶」とちがって香ばしい。「ブラックティー」はいわゆる「発酵茶」であるが、100%完全発酵した現在の「紅茶」はまだ出現していず、発酵度が30～60%の「部分発酵茶」である。種類は次のようなものがあった。

グリーンティー (価格の安い順)

タワンケイ Twankay/ シングロ Single: 安徽省の屯溪 Twankayで生産される。イギリス向け緑茶の半分を占めた。価格はブラックティーの最安値品ボヒーティーの2倍。シングロは安徽省南部の丘陵地帯の地名に由来する。

ハイソン Hyson 熙春: 春の成長した茶葉からつくる。安徽省屯溪産。タワンケイより良質。
ガンパウダー Gunpowder: 散弾銃弾のように丸く捻ったもの。大型の「インペリアル Imperial」(大珠)は緑茶の最高級品。

ブラックティー (価格の安い順)

ボヒー Bohee 武夷: 福建省武夷山の産で地名が転じたもの。最下級のブラックティーで価格も最安値。シーズン最後の夏の終わりに摘まれる。茶葉は捻れていず粗大で茎や小枝が混じる。

コングー Congou 工夫: ブラックティーの中級品。工夫とは手間のかかった意。価格はボヒーの2倍した。

スーチョン Suchong 小種: 一番摘みの葉からつくった香気ある上質品。葉は完全に捻れている。包種と烏龍に分かれる。

ペコー Pekoe 白毫: 茶の芽からつくる。芽の表面を覆うニコゲ(柔毛)が乾燥して白くなるのでこの名がある。中国茶の白茶で現在でも「銀針白毫」がある。

ヨーロッパに輸入された中国茶は、はじめの頃は緑茶が多かったが次第にブラックティーが増え、18世紀中期からはブラックティーが緑茶を凌駕するようになった。ブラックティーの方が緑茶より価格が安いものがあったことにもよるのだろう。